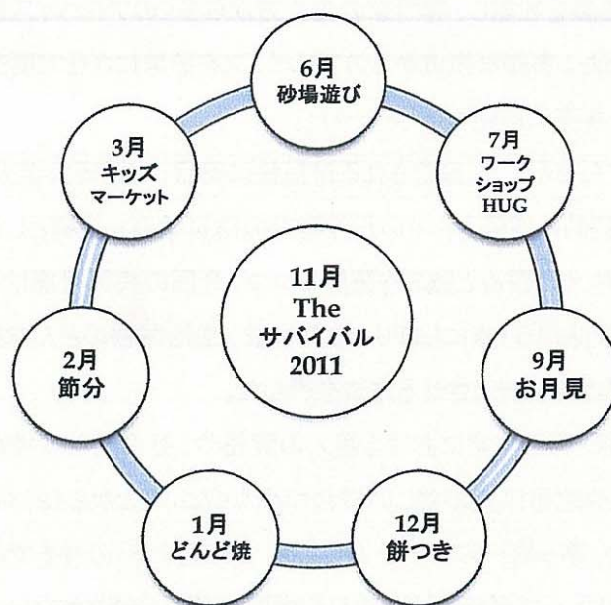


茅ヶ崎まるかじりプロジェクト 「The サバイバル 2011」 報告書



防災教育チャレンジプラン

この報告書は、防災教育チャレンジプランの支援を受けて製作しています。

防災教育チャレンジプラン、その後に向けて

1. はじめに

2011 年、防災教育チャレンジプラン¹実践団体として採択され、多様な専門的「知」や経験「知」と交流することができた。

科学的な理解や知識の伝達を仲介というより、その知識を私たちが、どのように理解し受け入れていくか、又日常生活の中で、どのような行動に結びつけるかを模索する 1 年となった。どういった防災共育²を実践するのが望ましいのか、仕事の合間に時間をみつけて、日々更新される膨大な情報を読み解くのは困難であったが、私たち母親が主体的に防災共育を進めていくことは、地震大国に子どもを生み育てる大人としての責任であり、未だ経験したことのない超高齢化社会を乗り越えるためにも必要な「態度」であると考えた。

幸いなことに、防災教育チャレンジプランには、中間発表と最終報告といった「場」が設定され、そこで、その時々葛藤を吐露し、専門家の先生方から多くのアドバイスを頂くことができたのは、大変ありがたかった。多様な視点からのアドバイスを参考にさせて頂き、私たちの「まち」の実情にあわせた防災共育に取り組むこととなった。

私たちは、『津波でんこ』に象徴される市民性に着目し、群馬大学大学院片田敏孝教授により包括的かつ客観的に評価されていた釜石市の防災教育を指標とした。生活者が主体的に取り組む防災共育ゆえの弱みと強みを認識しつつ、今回の実践目標は「地震→津波が来るかもしれない→逃げる」という 1 点にしぼり、自然体験、生活体験のどんな要素が不足しているかを考えながら、まずは体に覚えさせる方法を選んだ。

加えて(1)行動選択・意思決定における個人の責任や、社会的な環境が弊害となり個人だけでは適切な行動選択や意思決定が難しい場合が少なくないことから(2)行動選択・意思決定を支援する環境づくりを、茅ヶ崎トラストチーム(以降、CTTとする)の今までの取り組みの延長線上で整理し、生活者のニーズが行政の縦割りや学問分野で分断されないことを切に願った。

この報告書が出来上がる時には、新しいハザードマップの説明会が開かれているであろう。津波がくるかもしれない「まち」茅ヶ崎に住み続けることを選択するとならば、私たちは何をしなければいけないのか、そしてどんな覚悟が必要か、引き続き自問自答する必要があるだろう。

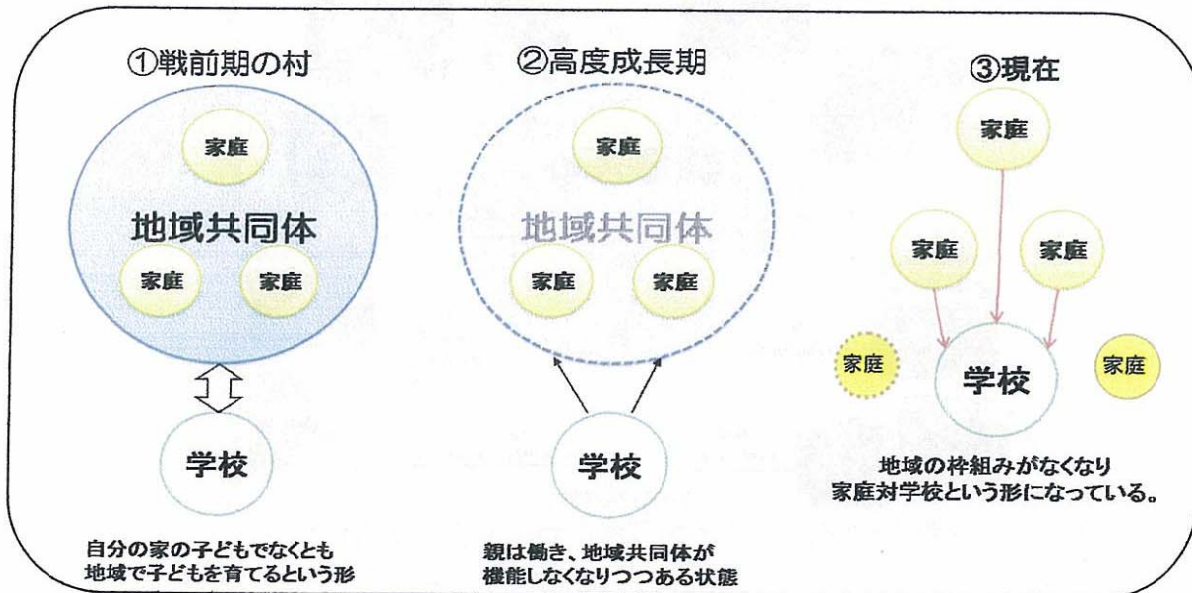
¹ 「いつやってくるかわからない災害に備え、大切な命を守り、できるだけ被害を減らし、万が一被害にあったときすぐに立ち直る力を一人一人が身に付けるため、全国の地域や学校で防災教育を推進する為のプラン」で、報告会等は、防災教育チャレンジプラン実行委員会、内閣府(防災担当)が主催している。なお、この防災教育チャレンジプランの実践は、(財)河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けている。

² 茅ヶ崎トラストチームでは、参加者と共に学び合い・考え合い・育み合うことが必要と考え、教育という言葉でなく、「共育」と記載している

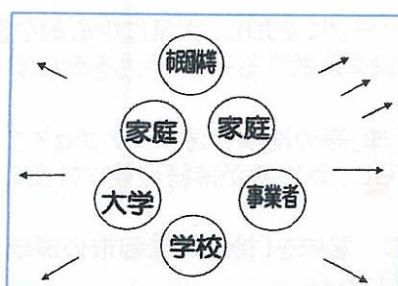
2. 防災教育チャレンジプランに取り組むにあたって

(1) 家族・地域・学校の三者の構造変化³

効果的な防災共育をおこなうためには、まず、家庭・地域・学校の三者の構造変化と、社会の変化をあわせて考える必要があると思われる。広田照幸先生の著書より引用し、検討する。



④週5日制が実施された2002年



『2002年の印象』

広田先生の著書を参考に、高橋作成

「2002年とはどんな年だった？マーケティング10大キーワード⁴」は、ブロードバンド・カメラ付携帯・翻訳（たとえば、犬の気持ちを翻訳）・個人ブランド・ブランド直営店の盛衰・エグゼリーナ・ウォルマート・中国・ニッポンであった。

人々は、よりよく生きるために働き、その結果お金に余裕ができた。お金をだせば美味しいモノを食べることも、買うこともできた。お金を出せば、会社も買収できた。お金を出せば、よい教育が受けられると考えられた。

まるで、欲望が拡散し続けて、協力すること・他人を思いやること・手間をかけることを学ぶ地域共同体の枠組みが見えづらくなっているようだった。この年、週5日制が実施され、地域で子どもたちを育む準備のできなかつた地域は、子どもたちから、4つの間「時間・空間・仲間・手間」を奪ってしまった。

この年、バラバラの関心を、持続可能な社会の担い手である子どもや若者に繋ぎとめようとするCTT(当時:浜っ子トラストチーム)の取り組みがはじまった。

(2) 「浜っ子パーク」に新たな視点を加える

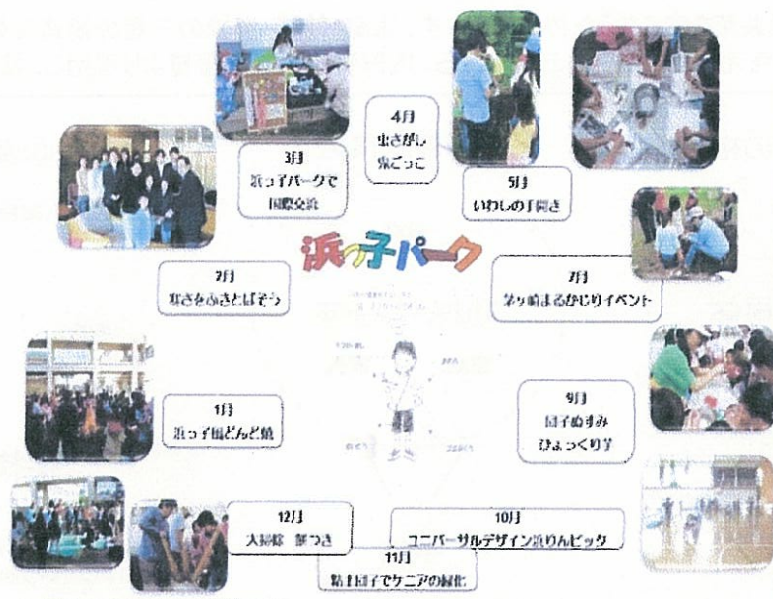
伝統文化への取り組み

2008年文化庁の委託事業である「伝統文化子ども教室」を開催し、なぜ年中行事が続いたのかを、校庭で体験・遊び場「浜っ子パーク」を年間を通して開催し、実践を積んできた経験から考えてみた。年中行事が生活の基盤となる農業を基に行われていたことをヒントに、地域の避

³教育展望 47(3), 40-47, 2001-04 教育調査研究所 広田照幸「特集 学校と家庭、教師と親との新しい関係 学校は家庭・地域と連携できるのか」から引用

⁴ <http://allabout.co.jp/gm/gc/292673/>より引用

難所となる校庭という「公共空間」で行われる年間行事に多様な情報を交流させることで、子どもも大人も、新しい社会を創りだすために必要な力を学び続ける「場」にできるのではないかと考えた。



2008 年『浜っ子風 歳時記』

郷土検定への取り組み

2009 年度の郷土検定への取り組み⁵は、楽しさから浜っ子パークに参加し、次第に中心的な役割を担うようになっていた子育て中の母親たちの活躍と、未来を象徴する子どもたちを軸にすることからはじまった。

郷土検定への取り組みは、多様な主体と連携し、多様な「知」等の地域資源にアクセスすることで「浜っ子パーク」に様々な『有用な経験・知識』をもたらし、参加者が持続可能な社会の担い手となる可能性を導き出すことができた。

必要にせまられて多様な主体と連携を続けてきたが、その意味を「持続可能都市の形成に向けた基礎的研究」⁶から引用すると、次のことになるとされる。

- ① 市内の市民的諸活動をネットワーク化することで、組織単体では到達することが難しい達成目標をかかげることができる(組織相互の利点)。
- ② ネットワーク化にもとづき形成される連携が、まち全体の活性化につながり、適切な公益性を提供する(地域社会の利点)。
- ③ これを郷土検定のプログラムにのせることで、諸活動のネットワークや連携の根拠を示し、まちの協力関係のストーリーを獲得する(CTT の説明力を高める利点)。

防災への取り組み

2010 年度、浜っ子パークに、環境問題にはじまり、伝統・地域の様々な資源といった視点を導入し、誰もが関心をもつであろう「防災」のテーマを加え始め、防災教育チャレンジプランへの応募と繋がった。

⁵ 日本財団の助成金により、茅ヶ崎トラストチームは「茅ヶ崎まるかじり検定」に着手

⁶ 湘南フォーラム: 文教大学湘南総合研究所紀要 14, 183-191, 海津 ゆりえ・山田修嗣「持続可能都市の形成に向けた基礎的研究—茅ヶ崎市における人的ネットワークとエコツーリズム資源を題材に—」

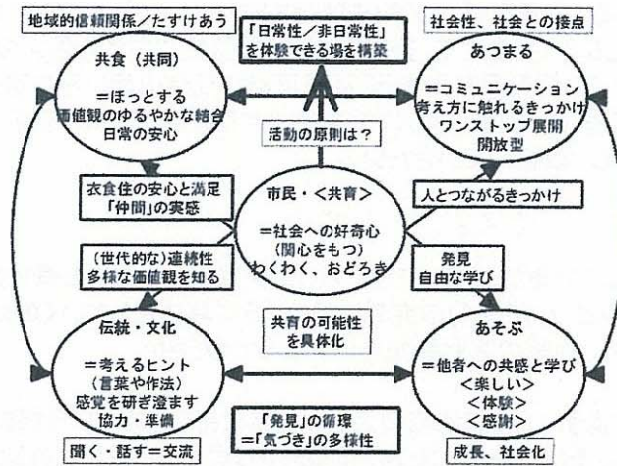
3. 防災教育チャレンジプランへの取り組み

『浜っ子パーク』への参加から、参画

浜っ子パークに遊びにきていた親子が、徐々に参加度を増し、CTTの意識的でない枠組み『茅ヶ崎トラストチームの活動軸』の「周辺の」な位置から「中心的」な役割を担うようになり、防災教育チャレンジプランへの取り組みは、いかに間口を広くするかを最重要課題とした。

加えて、防災・減災の学習要素をいかに「浜っ子パーク」に埋めこむかも重要な課題であった。

『茅ヶ崎トラストチームの活動軸』



『浜っ子パーク』という空間に埋め込まれた学習要素

子どもも大人も共に、「浜っ子パーク」で見聞きしたモノやコト・様々な体験に、学校で得た知識をリンクさせることで、より深い理解そして新たな知識を構成していく様子を見てきた。学習が周囲の環境とのかかわりの中で起きているのである。⁸

最終報告会のプレゼンは、『浜っ子パーク』という空間に埋め込んだ減災・防災要素を、かつて「浜っ子パーク」で行った「木登り」の楽しさから参加しはじめた、久能利香が自分の言葉で説明する。

⁷共同作成: 文教大学 国際学部 山田研究室

⁸文末に、その様子を記載(湘南総合研究所さんのご厚意で、出版前に掲載させていただいた)

多様な視点

CTTの活動は、個別の問題に特化していない人間の全体性に重きをおいた素人集団のボランティア活動であるため、持続性については何の担保もないし、基本的に評価されることはない。その脆弱さゆえ、一人ひとり・一つひとつの活動・まわりの社会環境に左右されることが多く、まさに吹けば飛んでしまうのである。おたがいさまの関係をつくることで、やっと支援を引き出している。

そんな中、防災教育チャレンジプランの実践団体に採択され、審査の先生方から多くのアドバイスを頂くことができ、背中を後押しされたり、全く考えていなかったことを指摘されたりして、取り組みを客観視することができ、大変ありがたかった。

以下は、2011年2月、10月と2回にわたるプレゼンでの防災教育チャレンジプランでの先生方からのアドバイスである。今年度は(1)茅ヶ崎トラストチームの今までの市民性共育への取り組みを「津波てんでんこ」にシフトさせて、行動選択・意思決定における個人の責任を明確にしようとし(2)加えてCTTの活動目的である「持続可能な社会の担い手を育む仕組みづくり」を、行動選択・意思決定を支援する社会づくりにシフトさせて取組んだ。引き続き、一つひとつのアドバイスから課題を設定し、取組んでいきたい。

2011年2月のCTTの発表に対してのアドバイス

プランニングはしっかりしているが、思いがもう少し伝わらない。防災と環境をどう結びつけるかをくふうしては、「ゆるりと、なが〜く」の発想をどのように具体化していくのか楽しみです。「いざっ」というときのため、地域の文化防災をいれこんでください。

「浜っ子」という名が示すように、海が地域の大きな接点に感じられている様子を容易に想像できます。海→津波などから、そばにあるリスクの理解を少しずつでも得られればとおもいます。加えて、子どもの教育に関係ある団体を支えていらっしゃる大人の方々への防災知識などの水平展開を頂ければ、子どもや地域に向けた効果は一層高まるのでは、とも感じます。

地域の住民が主体となって、防災対策に取り組むことは大事。災害時には住民同士が助け合うことが必要。このためには、日頃から顔の見える付き合いが大切。様々な人たちと協力した取組を期待しています。

具体的に「防災」をどうイベントに盛り込んでいくかがはっきりしていた方が実施しやすいと思います。

- ・津波についての啓発
- ・地域における繋がり、助け合い(老若男女)etc などについて、具体的にどのようなことを実施するか。
- ・自分たちの本来活動(健やかな子育てでしょうか?)に、防災の視点を加えることに大いに期待しています。
- ・他の団体との連携にも期待しています。
- ・子どもたちにとっても、何らかのチャレンジ、教育効果ができるようにご検討をお願いします。

ESDの市民教育として、どの様な展開になるか楽しみにしております。
国研のESDを利用いただきありがとうございます。
開発したシートなど是非教えてください。

趣味の繋がりー生活に根ざした行事／旧住民ー新住民
対話からうまれてくる課題をうまく整理してください。→それを継続していく。

様々な取組の中に防災的な要素を取り込もうという姿勢に敬意を表します。

ただし、「The サバイバル 2011」の内容についてありきたりというか、あまり子どもたちの食いつきが良くないような予想をしています。

チャレンジプランでは、様々な団体が様々な工夫を凝らして防災への取り組みを行っています。他の団体におけるプログラムを利用したり、コラボレーションすることにより、より魅力的な「The サバイバル2011」の実施を期待しています。

活動内容を具体化する際には、実行委員などの専門家も巻き込んで計画してほしいと思います。

「奉仕」で防災ボランティアを行う点がユニーク。

食、とくに災害時の食について、もっとつっこんで考えてみてはどうでしょう？

子育てグループの防災教育のチャレンジに期待。まず、地域の防災対策をしっかり学習して、それを周囲にひろめてみてはいかが？ 自分たちの手持ちプログラムにこだわらずに、いろんな物をばくってそれを子育てグループでよみかえて新しい展開を！

2011年10月のCTTの中間発表へのアドバイス

●自分たちで出来ることを、身近なことから、防災に興味をもってもらい、防災を学ぶことは、方向性としてとても良いと思います。色々なアイデアを出し合って、釜石を目指してがんばっていただきたいと思います。最終報告を楽しみにしています。

●今年度の事業終了後も、引き続き活動を継続してください。良い事例ですが、時間がかかるものであるように思います。継続していくことで、大きな実が結ぶのではないかと考えます。期待しております。

●消防機関(消防署、消防団)や、婦人防火クラブなども連携されたらどうでしょうか。

●「子どもたちに どのような変化があったか」について報告いただいたのは大変興味深かったです。ありがとうございました。

ここを、もう少し発展させて「それぞれのイベントごとに、子どもたちにどのような気づき/変化があったのか」について整理することで、「各イベントによって、子どもたちのどのような防災力/意識を向上させることができるか」について、貴重な知見を提案できるようになると思います。

●たくさんの団体や組織の協力を得るまでは、いろいろご苦労があったと思われます。地域の子どもたちと共に、工夫のあるイベントを多くこなしているのは、すばらしいと思います。チャレンジプラン、過去の事例も参考にして下さい。

●地域にある力をつないで結集しようという努力は重要で、地道な積み上げをして頂いていると感じました。また活動からの問題提起(あるものを分ける、など)を積み上げていただいていることも大切です。ぜひ、共有させていただきたく、まともに期待しています！

●東日本大震災をふまえて活動を組み立て直したことは評価。とくに、津波対策は大切。視点はよいが、具体化、何をするのか、もうひとつ見えない。

●遊び場を活用しての 自然なふれあいの中で教育活動をしているのは 大変良いと思います。ブラインド訓練には期待していますが、そのチャレンジを通じて、子どもたちがどのように成長するのかを明確化することが大切だと考えます。地域特性として、津波から身を守ることが大事などではないでしょうか。

- 校庭をフィールドとして、さまざまな活動を生み出されているようですが、それを他の場でも実現できるようにという視点でのマニュアル化を目指した報告書作りをして頂けませんか？
- 「情報」を何(誰)から得て、それをどう伝えるのか？
例えば、防災 Map の作成を通して、公の情報をベースとして、地域や施設の情報を盛り込んでみてはいかがか。
Map の作成には、防災科研の「e-コミ」が、ひとつのツールになると思います。
- 防災教育への取組姿勢や、問題意識がはっきりしており、意欲を十分に感じます。
行政との連携は、まずは話し出すこと、話し合うこと、自分達の取組目標や内容を知ってもらうだけでなく、相手方のことを知ること大切であることを前提に、取組んでいただければ、きっと活路は開けます。さらに活発な取り組みを期待しています。
- 「まち」を振りかえり、でてきた課題を、どうクリアしていくのか。ボトムアップの声を行政に伝え、変わったまちもあります。災害に向けての実行、行動をおこしてほしい・・・と思います。
ある学校では、子どもたちからの発言が、学校移転につながったそうです。
- 木村太郎氏率いる 逗子、葉山コミュニティー放送(株)との連携をはかってみてはいかがでしょうか。活動の周知・PR や、活動への周辺住民の参加サポートなどで、地域メディアとのコラボレーションは大きな支援になると考えます。
ここまで関わりをもてたことも/地域住民の人数規模を、数字として把握し、人口に対する比率をトレースしてみても？

茅ヶ崎まるかじりプロジェクト「The サバイバル2011」

* マニュアル「なまずミッション」は、文末を参照下さい。

当日の様子

事前ミッション 	■なぜ、事前ミッションをするか ・行動選択・意思決定における個人の責任 ・「災害用伝言ダイヤル 171」を使ってみる ■やってみての感想 ・「災害用伝言ダイヤル」の利用をイベントに組み込んでみたが、電話を借りる、というところから難題があった。 本当に「災害用伝言ダイヤル」は有効なのか、その検証結果を知りたい。
受付 	■大切にすること ・指示的な言い方をしない。子どもが話しやすい雰囲気作り。 ・少し時間はかかるが、対話を大切にしているので、丁寧に聞く。 ■感想 ・「通学路での危険な箇所は?」「困った時はどうする?」の質問に答える子供たちから、家庭でよく話し合ってる様子がうかがえた。 ・普段なかなか登校できない子がお友達と参加。とてもはきはき答え楽しそうに参加してくれた。 ・対応したスタッフもやってきた子どもたちも会話のやりとりをととても楽しんでいたように思いました。思ったよりスムーズに進行した。
なまずミッション■大切にすること ・対話を楽しむ   	■感想 ①「防災無線を聞き分けよ!」 ・一人の時にこの音が鳴ったら…と言えたら聴く顔が真剣になった。 ・音は、子どもたちに強烈な印象を残しているようだ。 ②「体を使って 距離を調べよ」 ・こども達は、よく話を聞き、手伝いも率先して行動できさせられている普段とは違い、自分の意思で動くときの反応の良さに 感心しました。 ・大人がこどもを信用し 頼りにする事でこどもは充実感や協調する楽しさを全身で感じとっているのかな。 ・「計算は何算?」「えっと、足し算?」学校で教わる知識を生活に使うよいチャンスになったと思います。 ③「体を使って 高さを求めよ!」 ・「津波って、こんなに高かったんだ!」とママ。 ・知っている高さを、改めて実感。 ・身近なものでだいたい規定になっている高さ(ドアの高さなど)を知っておいて、日ごろから感覚を身につけておくことも大切。 ④「学校の防災のお宝を発見せよ!」雨天の為中止 ⑤「何を伝えようとしているんだろう?」(手話) ・低学年の子には少し難しかったようだが、3、4年生が覚えようと何度も練習してくれていた。 普段、あまり考えない事を考える良い機会だったと思う。 ・大人として、子どもたちが真剣な眼差しで話を聞き、覚えようとする姿をみて、自分自身ももっとしっかり熟知して教えなければ!と思った。 ・手話にはとても興味をもったようで、まだ使ったりしています。初めて手話を知った子もいました。なんで手話なのか、手話って何?と考えるきっかけになったようです。 ・(お母さんが聾者の娘さんで手話ができる)「手話教えてあげて」とお願いしたら嬉しそうに教えていた。自分の知っていること(できること)が他の人の役に立つという実感があったようだ。



⑥「堆肥場にトイレを設置せよ」 雨天のため中止

⑦「サバイバルコースをクリアせよ！」

- ・瓦礫の下の人を助けるには？力を合わせて工夫すること、こんなことができる、を実際に体験できたことは、強くこころに残ったようです。
- ・目隠しでは、思った以上にこわくて、早く動けない。実際にもっと暗かったらもっと動けないだろうと言っていました。
- ・真っ暗だとすごく怖かった
- ・キャップ(ガラス破片)がすごく痛かった
- ・なかなか前に進めなかった
- ・怖いという割に何度も繰り返して体験する子が多く、人気のブースだった。
- ・トンネルが壊れると直してくれたり、外に飛び出したキャップを戻してくれたら、子どもたちは自分たちで率先して動いていた。
- ・幼稚園児にとっては単純に楽しい遊びだったようだ。

⑧「地震だ！津波だ！てんでんこ！」

- ・津波の避難シュミレーションも良かったですが 茅ヶ崎のどれだけの人が危機感を持っているのかは不安です。パークを通して新しいコミュニティが広がる事を願います。ありがとうございました。
- ・「ちゃんと2列でいった？」「リーダーが先頭で指示をしないと」と避難方法について意見。
- ・5分もかからないで行けると思ったけど、意外と時間がかかった。
- ・5分って思ったより短かった。

⑨「空間：津波から避難。とりあえず3時間、立ったままかもしれない・・・を体験せよ！」

- ・学校の廊下に人がぎっしりいたら、長くいるのは大変だし、トイレにもなかなかいけないな～
- ・想像していたより きつきつだったので驚いている。このことをもっと周知させる必要がある。

⑩「知っとこゾーンでクイズに答えよ！」

- ・なぜ、いろいろな情報を掲示するかを、コミュニケーションすることで、意味が伝わった。
- ・何も語らなければ、みな素通り
- ・工夫をする必要あり。

おたがいさまプロジェクト



共食(炊き出し)



①石巻Tシャツプロジェクト ②フリマ

- ・(総合的な学習で参加していた4年生)お金だけでない支援があることがわかった。
- ・思ったよりお金が集まった。
- ・(4-3 自分たちの祭を企画している)楽しかったけど、売るのは難しかったけど勉強になった。本番に近づいた。
- ・石巻サポーターズの話聞いて 今までわからなかったことがわかってよかった。

- 大勢の人がいたら、ご飯も皆でちよつとずつわけけるから、お腹いっぱいには食べられないな～
- ・みんなで食べるとおいしい。
- ・自分で切ったからよけいにおいしい～。大根、切っても切ってもなかなか終わらなかった…。
- ・切っても切っても終わらなくて、大変だった！慣れると上手にできるようになった。
- 褒められると嬉しかった。
- ・寒い日だったので、体が温まった。温かいだけでごちそうだと思った。
- ・天気が悪くて ほんとのサバイバルだった。でも、避難所ではこんなこともあるもんね。
- ・311の時は雪が降ったりして、寒さもこんなもんじゃなかったんだろうな。



2011年11月21日放送

はまかぜ ちがさき

どうだった？

—たのしかったよね

どんなところが？

—いろいろなことが体験できたこと

印象に残ったことは？

—人を助けること

どんな風にたのしかった？

—積み木や机の中から、パイプを使って人を助けること

本当におこったらどうしていいかわかった。

どうだった？

—ふだんは大きな地震を考えないで行動している。

大きな地震を想定して動くみたいへんだとわかった。

どうだった？

—段ボール修理やトンネルが楽しかった。でも目隠しをした時はこわかった。

—ごはんをつくってくれたのを感謝しています。おいしかった。

—目隠しがおもしろかった トンネルとかならって楽しかった

—ガラスのキャップ(ペットボトルのふた)がこわかった。

秘密のミッションはどうだった？

—緑の線(狭さを表現するために、床にテープを張り、その中に入る)が窮屈。

実際は もうちょっと我慢しようと思った。

—5分の制限で3階にまで逃げられなかった。

—急に警報がなってびっくり

どうでしたか？(豪雨の中、火起こししてくれたお父さんボランティアに)

—災害は、天候に関係なくやってくるので、いい経験でした。

どうだった？

—遊べたし、たのしいのに学びだったので、これからも学んだことを活用していきたい。



2011年11月25日号

茅ヶ崎トラストチーム

体感して身を守れ

教育

80人が参加し防災プロジェクト



津波警報が鳴り校舎の3階に避難した子ども達

子育てをする母親世代が中心となって活動する「茅ヶ崎トラストチーム」(高橋玲子代表)が11月19日に浜須賀小学校で「茅ヶ崎まるかじりプロジェクト『The サバイバル2011』」と題した防災イベントを実施した。

同チームは浜須賀地区で活動する団体。小学校の校庭を遊び空間にする「浜っ子パーク」のほか、食を通じて交流する「eco・cafe・Smile」、地域資源を活用する「茅ヶ崎まるかじりプロジェクト」などを企画運営している。防災に特化した

た催しとしては昨年に引き続き今回で2回目です。内閣府が主催する防災教育チャレンジランの一環として位置づけられ、行われた。

実践型の防災訓練を

当日は小学生を主に、チームスタッフや地域住民ら約 80 人が参加。イベントは子ども達が集中できるよう 10 のミッションを与えたゲーム形式で進行。ジャッキアップや毛布担架、目隠しによるトンネル通過など多岐にわたる内容にチャレンジしたが、中でも地域性を考慮した津波訓練は秘密のミッションとして実際に地震速報と津波警報を鳴らす念の入れ様で、5分間のうちに校舎3階まで避難出来るかを試した。

高橋代表は「3・11以降、とにかく体験していくことが大切だと再確認しています。(子ども達に)場を提供するのが私達の役割で、正しいことを教えるのが目的ではありません。これを機に自分で考え行動する力が養えれば」と思いを語った。子ども達は与えられたミッションを楽しみながらも真剣な眼差しで取り組み、声を掛け合いながら協力する姿がみられた。実践部隊として指揮に当たった久能利香副代表はイベントを振り返り「遊びの中から緊急時の対応というものを身をもって感じてもらいたかった。体感して地域の防災力向上へとつながれば」と話していた。



神奈川県コミュニティサイト 2011年12月7日

自力避難できる子に、母親らが「津波体験型」防災訓練/茅ヶ崎



津波警報が鳴り校舎の3階に避難した子ども達。事前の告知をせずに緊急地震速報が流れ、身を低くする子どもたち
＝茅ヶ崎市立浜須賀小学校体育館

「きみが一人で遊んでいる時に災害がくるかもしれない。さあ、どうする？」。防災教育を盛り込んだ体験イベント「The サバイバル2011」が茅ヶ崎市内で行われ、子どもや地域住民ら約 80 人が参加した。地域の母親たちでつくる「茅ヶ崎トラストチーム」が企画。内閣府などが主催する「防災教育チャレンジプラン」にも採択されている。目指したのは、三陸地方に伝わる教え「津波てんでんこ」のように自分の身を自分で守る力を付けることだ。

■五感■

11月19日午前10時、市立浜須賀小学校体育館。子どもたちは10の指令が記されたカードを受け取り、会場内を自由に回った。

指令は「防災無線を聞き分けよ」「高さを調べよ」などだ。ポイント各所にトラストチームのメンバーがいるが、指示的な言い方はせず、子どもに体験を促す。

「距離を調べよ」では、自分の歩幅を計り、10メートル先のカラーコーンまで何歩で行けるのか計算する。メンバーの担当者は「ただ歩くのではなく、自分の体を使って『距離感』をつかんでほしい」と話した。

指令をやり遂げるとポイントが与えられ、子どもたちがゲーム感覚で取り組める内容だ。

■5分■

午前11時45分。会場内に突然、緊急地震速報が響いた。その1分後には大津波警報が流された。

「えっ？ 本当に行くの？」。事前に知らされていない子どもたちは、戸惑いつつメンバーらの誘導で、別の校舎3階まで急いで避難した。

「一緒に来たお友達はいますか？」。メンバーの久能利香さんは約 80 人の参加者を前に「5分で避難したのは 55 人。この訓練は『5分』がどれぐらいの長さかを知ってもらうため」と説明した。

市の津波ハザードマップに示されている津波第1波到達時間を目安にしたが、「間に合ったかどうか」ではなく「5分がどれぐらいの長さなのかを知る」ことを重視した。

■役割■

代表の高橋玲子さんは、今回の課題として(1)専門家との連携(2)地域内での情報共有(3)参加者からのフィードバックを挙げる。

企画時、「プログラム」の専門家からアドバイスを得ていたが「参加者に伝えたことが合っているかどうかを検証するには専門家とのネットワークが必要。専門家の後押しがないと、地域へ

の還元もしにくい」と話す。今月 17 日に市内の県立茅ヶ崎里山公園で行う体験イベントは、市内にキャンパスを持つ文教大と連携する予定だ。

トラストチームが地域で果たす役割が明確になったと高橋さん。「『教える』ということは絶対にしない。『防災』や『環境』など、自分のこととして考える場、気付きの場を提供していきたい」

◆茅ヶ崎トラストチーム 茅ヶ崎市立浜須賀小学校のPTA活動などを通して知り合った母親ら7人がメンバー。2002年ごろから、遊びと学びの場を提供する「浜っ子パーク」の活動を開始。災害時に避難所となる市立浜須賀小学校の校庭で月1回開催している。

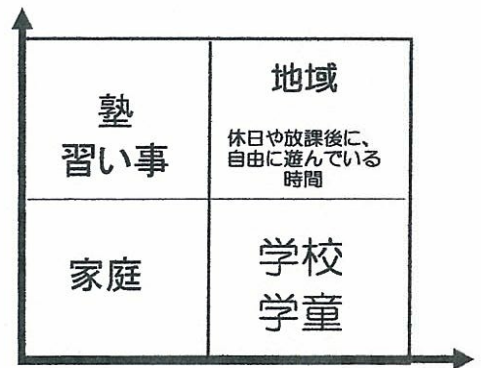
4. The サバイバル 2011、そのあと

浜っ子パークを開催するたびに、道中の安全や、地震等がおきた時の家族のお約束についてチラシに記載していることもあり、遊びにきた子どもたちに、家族との約束の話や、大きな地震がきたら、どうする？と聞くと、「上に逃げる！」と答えてくれるようになった。

「地震→津波がくるかもしれない→逃げる！」という目的は、達成できたと思われる。

しかし、子どもたちは、校庭だけで遊んでいるわけではない。小学校高学年にもなれば、自由に遊ぶであろう。中学生にもなれば、クラブ活動で試合に出かけるであろう。成長と共に行動範囲が広がっていく。

防災・減災への取り組みは、わが「まち」だけの問題ではなく、今後、オール茅ヶ崎での取り組みが必要となってくるのだろう。



5. 課題

防災教育チャレンジプランの2つの取り組み

①「浜っ子パーク」と②対話型体感イベント「茅ヶ崎まるかじりプロジェクト『Theサバイバル 2011』」の実践は、精度を上げる必要はあるものの、参加者の反応から推測するに一定の成果があった。

加えて、別事業であるが、子どもたちの自主的な企画、ディズニーランドに負けないくらい楽しい「茅ヶ崎まるかじりプロジェクト～隠れ鬼ごっこ～茅ヶ崎里山公園逃走中！～」⁹が、大人の様々な条件を受け入れることで実現させることができた。この成功体験から「楽しいこと」と、防災共育・環境共育などの市民共育等は、いくつかの連携条件をクリアすれば、全く別事業とのパートナーシップ事業として、あるいはマッチングイベントとして成立すると確信した。

子どもたちの自由を確保するために、私たちは何をすればいいのか、選択の時かもしれない。目指すは、市民力か。

しかし、これらの経験を不確実な社会を生き延びる生活者の知恵とするには、まだまだ課題がある。3.11 で気づかされたことは、地震→津波だけで終わらない現実であった。

以下の3点を今後の課題としたい。

- ① 「いざっ！」という時に発揮できる、ゆるやかなネットワークを確実なものにすること
- ② 生活者が、環境問題や様々なリスク、それに伴う経済問題を、充分理解した上で、行動を選択し、意思決定できるような情報交流・情報蓄積の身近なプラットフォームの構築
- ③ 生活者の地道な取り組みを評価し、地域防災力あるいは市民力として積み上げることのできる指標の構築

⁹文教大学湘南総合研究所 共同研究「児童における個人から集団への関係づくりの拡充プロセスについての実践的研究」の中で 2011 年 12 月に実施



茅ヶ崎まるかじ プロジェクト The サバイバル2011

mission



運営マニュアル

1 目的

いつやってくるかわからない災害に備え、大切な命を守り、できるだけ被害を減らし、

万が一被害にあったときすぐに立ち直る力を一人一人が身に付ける

(1) 「目指せ！釜石!!てんでんこ」 なぜ、釜石か。なぜ、「てんでんこ」か。

- ・ 釜石市と同じように海に面している茅ヶ崎。地震と津波をセットで考える必要がある
- ・ 防災教育で意識を変え、命を守ることができる
- ・ 自分で考え・判断し、行動するためには一人ひとりの自覚と自立が大切。
- ・ 災害だけでなく一市民として、日頃からてんでんこになる必要がある。
- ・ その上で、意見を持ち寄り、相談し、考える。
- ・ 防災教育にはコミュニケーションが不可欠

2 茅ヶ崎まるかじりプロジェクト『Theサバイバル2011』

(1) なぜ、体感か。なぜ、ゲームか。

災害は、いつどんな時に起こるのか分からない、ということを私たちは経験した。

知識や経験の少ない子どもたちが一人にいる時にもそれは起こる。

自分の身を自分で守らなくてはならないが、はたして大丈夫か？

現在の子どもたちをみていると、物に囲まれ、整った・安全な環境の中で過ごしている。

子どもが、一人にいる時に、大地震が起きたら誰も指示してくれない。

身を守るのに頼りになるのは自分自身。

いざという時に、的確に判断し行動できるように、知識だけでなく五感・からだの能力を重視した。

楽しみながらしないと身につかない…だからゲーム。

人は関心・興味がなければ いくらいいことを聞いたり、見たりしても 素通りしてしまう。

楽しい、もっとやりたい、どうして？という好奇心をそそるためにゲームを取り入れている。

また、子どもたちにとっては、いくら大切とは言え「防災」といって自ら参加するとは到底思えない。

楽しそうだから行ってみよう という入り口として遊び感覚がとても重要なのだ。

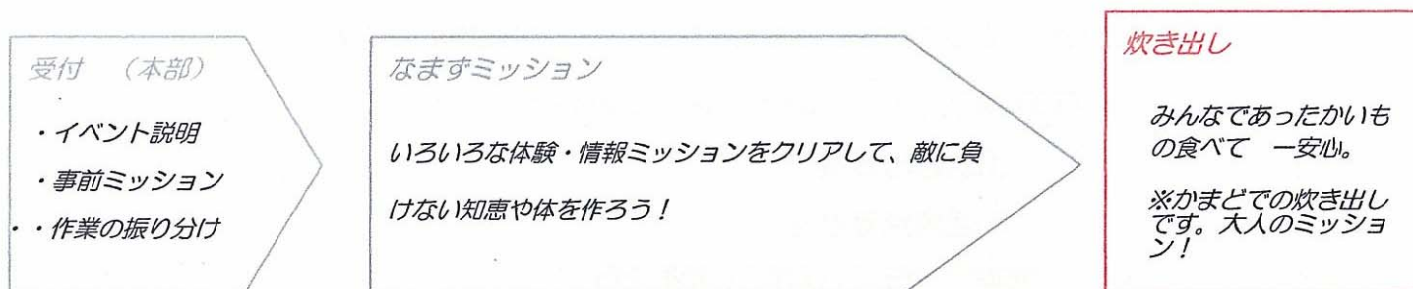
(2) 概要

1. 海のそばの「まち」に住むリスクを知る（知識）
2. どんなことがあっても、生き抜く力を育む（体感）
 - a. 五感、からだを使った、「なまずミッション」体感ゲーム
3. おたがいさまの関係をつくる：（互助）
 - a. おたがいさまの関係を築く
 - b. 折り合いをつける
 - c. ママつながり

3 期待される効果

- ◎ 身体感覚や五感を使って、防災に関する情報を、自分で得、自分の身や心を守ることができる。
- ◎ 大人は、子どもの支援者として、イベントの趣旨を理解し、声をかけあい、協力してイベントの運営に参加する。
- ◎ その大人たちの後ろ姿をみせることで、子どもたちの自主性や協調性を育む。
- ◎ 「自然、人、社会を繋ぎ、未来を紡ぐ」ことを通して市民性を高め、持続可能な社会の担い手を育む地域社会を目指す機運が高まる

4. ゲームの進め方



お互いさまプロジェクト

- 1 「T シャツで復興支援」※着なくなったT シャツをお持ち下さい。「石巻ママサポーターズ」で検索！
- 2 「フリマで復興支援」

(3) 受 付

(ア) 本部機能

大切にすること・・・指示的な言い方をしない。子どもが話しやすい雰囲気作り。

※少し時間はかかるが、対話を大切にしているので、丁寧に聞く。

名簿記入 (参加票提出)

参加者全員

※参加票が無い方は 名簿に記入してもらう

(イ) ミッション参加者 (主にこども)

※ゲームカード (通番) 配布

イベント参加の注意点

- ①ファーストミッションは必ず最初に体験する
- ②そのあとは地図を見てすいてるところから行っていい

事前ミッションの確認

- ①おうちの人との約束 +1 ポイント
 - ・ サバイバルにくることを誰と話をした？
 - ・ もし、ケガをしたら… おうちの電話番号が言える？
 - ・ 学校へくる途中の交通の危ないところを確認した？
 - ・ 学校へくる途中、もし地震が起きたら…どうすればいいか決めたことを教えて。

- ②防災伝言板のメッセージ +1 ポイント

- ③6月の浜っ子パーク「校庭での宝探し」へ参加したおともだちはキーワード覚えてる？ +1 ポイント

(ウ) 支援者（主におとな）

※スタッフとしての支援、避難ミッション（大人のみ告知）時の支援

作業の振り分け ※腕にガムテープで色分け

- ①炊き出し班
- ②活動見守り班

携帯にアラーム登録（可能な方）

- ①避難時の時間を登録（11:45、11:46、11:50）
- ②避難経路の memo を渡す

(エ) 回収物

- ①T シャツ、フリマの物品→お互い様プロジェクトへ
- ②キャップ→回収ボックスへ
- ③ミッションに使ったカードは回収。答え合わせの前に帰る子どもたちのものは一緒に答え合わせをしてあげる

準備 名簿、できますテープ、筆記用具、見取り図、ゲームカード、避難経路のメモ

人員 新家、小山、篠、野澤、牧野（ミッション④）と兼務

※小山…炊き出しとの調整

(4) ミッション内容

① ファーストミッション 「防災無線を聞き分けよ！」

・・・1ポイント

緊急地震速報、津波警報、大津波警報 を鳴らして確認。

※ 他のミッションの進む前に必ずこのミッションを通過すること。

⑩「知っとこゾーンでクイズに答えよ！」（イ）情報の収集 いざという時の防災情報もセットで

準備 防災無線のCD（久能）、CD カセット（PTA）

緊急地震速報の録音（コピー不可能なため）

② ミッション 「体を使って 距離を調べよ！」

・・・1ポイント

(ア) 各自の歩幅を確認。

(イ) 距離(固定) = 歩幅 × 歩数 …… さて正解は？

準備 巻尺、三角コーン

固定の距離にラインを引く(当日)

③ ミッション 「体を使って 高さを求めよ！」

・・・1ポイント

(ア) 東門の脇の木の高さを ヒントを基に調べよう

準備 予め木の高さ、非常階段の高さを測っておく

(木・・・福田さんに相談、建物・・・施設課)

ヒントに貼っておく高さを書いた 紙

④ ミッション 「学校の防災のお宝を発見せよ！」

1. 全部見つけて ……6ポイント

(ア) ヒント(写真やクイズ)を頼りに探す。

(イ) 雨水タンク、非常階段、防災倉庫、風力・太陽光発電、堆肥場、給水タンク

(ウ) 探すのは上の6点。でも、複数箇所あるものもあり。(雨水タンク、非常階段)

2. 自分で見つけたお宝1つにつき ……1ポイント

(エ) その他自分で使えそう(避難所で使えそう、防災・減災につながりそうなもの)と思うものがあったら申請OK。理由があれば採用。ポイント加点

(オ) イベント全体の答え合わせの時に みんなが気づいたお宝を大地図内に書き込む。

準備 ・ヒントの写真、クイズ ・学校地図の拡大版 ・ポストイット ・サインペン

人員 本部兼務

⑤ ミッション 「何を伝えようとしているんだろう？」(手話)

・・・1ポイント

※ コミュニケーションの方法には、いろいろあることを知ろう

準備

人員 1名確定

⑥ ミッション 「もうがまんできな〜い。急いでトイレを設置せよ！」

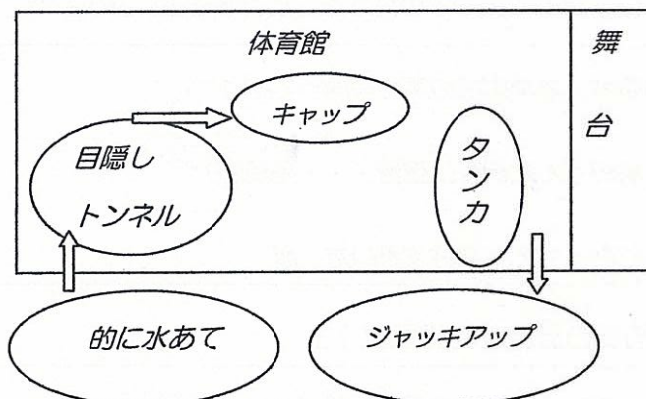
・・・1ポイント

(ア) 堆肥場でダンボールのトイレを設置する。

(イ) トイレにまつわるクイズに答える

準備 ダンボール、カッター、ビニール袋 人員

⑦ ミッション 「サバイバルコースをクリアせよ！」 ・・・各1ポイント 全部クリアで5ポイント



(ア) 体育館内は靴を脱ぐ

(イ) 「ジャッキアップ」か「的に水あて」からスタート

(ウ) ジャッキアップ・・・台の下に挟まったぬいぐるみを助け出す。

(エ) 的に当て・・・消火器で的に水を当てる。回ったらOK

(オ) 目隠しトンネル・・・ビニールのトンネルをぬける。

① 暗いところ、火事の場合姿勢を低くして確認しながら進む

(カ) キャップ・・・ペットボトルのキャップの上を歩く。＊目隠しなくてもいい

(キ) 毛布タンカ・・・7人集まったら行う。実際の人間を運ぶ。

① 持ち上げたり、降ろしたりには注意が必要。

② ヘルメット、下にマット。

準備 ・消火器（防災対策課）・ジャッキ（防災対策課）・トンネル（なかよし）

・キャップ（浜中、持寄り）・マット ・ヘルメット・毛布（久能）・目隠し用
バンダナ

※集めたキャップは使用後、浜中へ …15日推進協経由で生徒会へ。17日回収

人員 ジャッキアップ、消火器 各1名、タンカ1名、トンネル・キャップ1名…計4名

⑧ミッション 「地震だ！津波だ！てんでんこ！」 ちゃんと逃げれたら・・・1ポイント

1. 11:45 緊急地震速報。地震発生。
2. 11:46 まもなく大津波警報発令。
 - (ア) スタッフも携帯のタイマーを11:45、11:46、11:50にセットしておいて、周りにいる人たちに声をかけながら中棟3Fに向かう。(職員玄関・放送室脇ドアから入る)
 - (イ) 雨天時…靴を履いて渡り廊下を使って中棟3Fへ
 - (ウ) 見守りスタッフが校舎の東側や体育館にいる人が残った人がいないか確認しながら中棟へ。
 - (エ) 久能(職員室階段前)に報告して上がる。久能はそれを聞いて一緒に上がる。久能3F到着で終了。
 - (オ) かかったタイムを計る。 ※タイムキーパー・・・久能
3. 11:50 地震発生後5分
 - 3Fに到着していただいた人数の把握・・・浅川
 - (カ) 到着後、「一緒に来たお友達はいるかな？」と確認。等
 - (キ) ゲームカードの通番で人数把握。

準備 ・ストップウォッチ(学校) ・養生シート(購入)

前日準備 1F~3F まで養生シートを敷く

人員 全員(ただし、火の番2名程度残る。・・・小山他1名)

⑨ミッション 「空間：津波から避難。とりあえず3時間、立ったままかもしれない・を体験せよ！」

・・・1ポイント

- (ア) 避難した3Fで行う
- (イ) 参加者80名と想定。人口密度を概算で出してテープで印をした範囲に入る
- (ウ) 朝の通勤電車？少し余裕？座れるくらいのすきまがある？検証してみよう。

準備 人口密度の概算…廊下の面積、徒歩80m/分で5分以内に集まる地域

人口を算出

※廊下の面積・・・施設課 地域人口・・・岡崎さん

人員 全員

⑩ミッション 「知っとこゾーンでクイズに答えよ！」

・・・1ポイント

(ア) 必要な情報をキャッチしてもらうためのクイズ。

掲示情報①自治会の訓練の様子

②浜須賀会館管理運営委員会 での防災情報のまとめ

③かながわコープ茅ヶ崎市寒川町エリア会

④被災地での様子 ・ 釜石市での取り組み ・ 石巻での様子

(イ) 情報の収集 いざという時の防災情報

①防災情報サイト

地震情報、津波情報、その他、台風や河川の水位観測情報など茅ヶ崎のエリア情報

②茅ヶ崎メール配信サービス

- ・ 緊急地震速報や津波警報などの全国瞬時警報システムで放送する内容を配信
- ・ ライフラインの被害、大雨や洪水など大規模な災害情報を配信
- ・ 災害情報だけでなく、防犯、イベント情報、ごみ出しルールなど、生活にかかわる情報も配信

(ウ) QRコードでアクセス

準備 問題作り

人員 なし 自分で掲示物をみて探す

(5) お互いさまプロジェクト

おたがいさまの関係をつくる(互助)

①石巻Tシャツプロジェクト

石巻ママサポーターズの活動(古いTシャツで布ぞうりを作成し販売する自立活動)に賛同。

Tシャツの回収で支援

②フリマ

使わなくなったもの等を回収し 販売。売り上げは復興支援金として寄付。

準備 回収ボックス

人員 とりまとめ 鶴田さん

プロジェクトスタッフ(4-3クラス参加 担任:菊池先生)

(6) 共食（炊き出し）

（ア）非常時を想定し かまどと一斗缶を使用

（イ）地産地消

①トン汁（80名分） 一斗缶×3

材料…量の算定・・・学校給食の献立を参考に予算など考慮して調整

切り方・・・1.薄く切る

2.親指大に統一（早く火が通る、均等に配布できる）

3.皮ごと切る（ゴミを出さない）

作業…担当者の指導のもと キッズスタッフが作業

予算…肉、野菜、調味料・・・2000 円

②ご飯（4*） かまど、電気炊飯器（1 升炊き）

おにぎり…炊き上がりを受付と連携、支援者を募って作業

予算…

準備 大根×5、さといも×40、下仁田ネギ×20、小松菜×10、豚バラ

こんにゃく、あぶらあげ、お米

(7) ふりかえり

